

## 海外での教育的ニーズのある児童への支援

～現地での支援と国内転入への支援を考える～

### Support for Children with Special Educational Needs in Foreign Countries

漆澤 恭子<sup>1</sup> 阿子島 茂美<sup>2</sup> 伊澤 正雄<sup>3</sup> 安岡 由紀子<sup>4</sup>

現在中国A日本人学校における教育的ニーズのある児童生徒の学校生活や、児童生徒を取りまく環境などを知り、そこで行われた支援の実際について調べ、その有効性となぜそれが可能だったかを述べる。さらに、帰国転入に関しては、教育的ニーズのある児童生徒、保護者、日本人学校の担任らがどんな不安を持っているか、また、事例から転入直後の課題などを明らかにして、スムーズな帰国国内転入のための方途を探る。

キーワード：教育的ニーズ、支援、日本人学校、帰国転入、連携

#### はじめに

2009年には外国に在住する日本人は111万人となり、今後も増化の傾向にある（前年比2.89%増、外務省領事局統計）。それに伴い海外に住む義務教育段階の児童生徒も58,304人（外務省・管内在留邦人子女数2006年4月15日現在）おり、多くは在外教育施設の日本人学校や補習校、及び現地校で学んでいる。

突然の海外への転校はどの子にもストレスをもたらす。特に発達障害のある子どもたちは環境の変化には弱く、自己調整能力の発達が阻害されやすい。日本人学校の現場では教育的ニーズのある児童生徒の数は決して少なくないと思われる。

さらにその上、海外という特殊事情が加わり、重症化・複雑化するケースも見られる。だが、サポートのための社会的環境は国内と大きく異なり、日本人学校の特別支援教育体制をはじめとし、児童相談所や、教育相談所、小児病院など児童生徒の発達を支える公のリソースや、塾や家庭教師、スポーツクラブなどの社会教育も十分ではない。

本研究では研究Iとして日本人学校での特別支援

の問題と解決にむけての実践の報告、研究IIでは、教育的ニーズのある児童・生徒の帰国転入への不安や要望を知り、スムーズな帰国転入のための方途を探る。

リソースの少ない海外での教育的ニーズに応えるためには、何ができるのか、また何ができないのかを検討することにより、「人・物・金」の「人」が中心となって活動することが「物・金」の乏しさを補い滑らかに支援活動ができると考える。またこの支援方法は海外のみならず、国内でもリソースの少ない地域でのサポート方法として有効性があるとも考える。

#### 研究I

##### 1. 研究目的

リソースの少ない海外での教育的ニーズに応えるために、1) 海外生活の教育的ニーズの実態調査、2) 保護者と発達支援者DS（ディベロップメンタル・サポーター<sup>\*)</sup>が自主的に行った実践報告をし、その中で人と人をつなぐことが心理学的・精神医

1 植草学園短期大学

2 十文字学園女子大学

3 A日本人学校スーパーバイザー

4 A日本人学校保護者

学的にも治療効果が高いことを検討する。

※DS(ディベロップメンタル・サポーター、developmental supporter、発達支援者)

## 2. 方法

### (1) A日本人学校教育相談室における実態調査

A日本人学校での生活や、児童生徒をとりまく環境についての実態調査を行った。

#### ①A市の公的教育施設に関するリソース調査

#### ②教育的ニーズの調査(2008年度)

A日本人学校の情況

学校の規模(2009年4月現在)

- ・小学校486名・中学校164名 全在籍児童生徒数約650名
- ・学級数 小学校19学級(特別支援学級1学級含む) 中学校6学級
- ・派遣教員数28名
- ・スクールカウンセラーが常駐している。日本人学校でスクールカウンセラーの常駐は他にない。

対象者：A日本人学校教育相談室へ相談のあった児童生徒82名

内 訳：教員(15名)からの相談38件(そのうち発達障害〔疑いも含む〕21件)

保護者(14名)からの相談44件(そのうち発達障害〔疑いも含む〕13名)

手続き：教育相談室を訪れた相談者(保護者44名と教員15名)からの聞き取り、アセスメント等

### (2) 教育的ニーズに応えるために行った保護者の自助的支援活動「どんぐり会」の報告

対象者：特別な支援を要する児童生徒と保護者11家族(児童生徒11名 その兄弟姉妹6名 保護者)(2010年3月現在)

サポーターとして発達支援者D.S.(主に留学中の大

学生多数)とスクールカウンセラー1名が担当した。

### (3)「どんぐり会」参加者へのアンケート調査

対象者：「どんぐり会」に参加した保護者と児童生徒11家族(児童生徒11名

その兄弟姉妹6名 保護者)(2010年3月現在)

手続き：自由記述による質問紙

## 3. 結果

### (1) A日本人学校教育相談室における実態調査

#### ①A市の公的教育施設に関するリソース調査

A市の公的教育関連施設に関するリソース(表1)で示されたようにA市における公的機関の施設はほとんどない。中国人使用のものもあるが言語・法律・習慣等の違いから使用しにくいもの、できないものが多い。児童生徒の生活環境は地域としての受け皿のない制限の多いものとなる。特に法律は海外に在住のため、日本国のものの適応外である。発達障害者支援法などの法的な裏づけもないため、支援なども制限の多いものとならざるを得ない。

#### ②教育的ニーズの調査(2008年度)

相談の内容の分類を行った。

a 教員(15名)から相談のあった児童・生徒は38名であった。

そのうち、発達障害または、発達障害を考えられる児童・生徒は21ケースあり、相談内訳では55%となる。次いでそれ以外の社会性の問題が12名、学習困難が5名であった(図1)。

表1 A市における公的教育関連施設のリソース情況

A都市にない公的機関	あるにはあるが・・・
高等学校 特別支援学校 通級学級 保育園 保健所 教育委員会 教育相談所 公立図書館 児童館 児童相談所・・・	警察 救急車(当然中国国内向け) 病院(市内で日本人小児科医1名 精神科医0名) 本屋(1軒) テレビ 雑誌 カラオケ 塾(公寓内に)

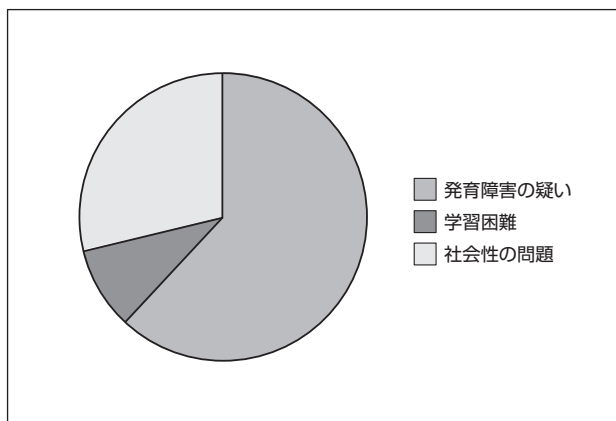


図1 教員からの教育相談室への相談内容

b 保護者44名からの相談では、発達障害か発達障害と思われる児童の相談が13ケースで29.5%であった。不登校または、登校渋りについての相談が6ケース、また、友人関係についての相談も6ケースであった。その他の相談は、海外での暮らしのストレスをはじめ、多種多様であった(図2)。

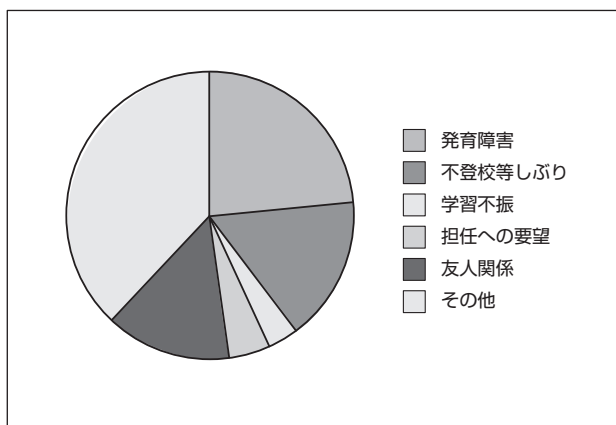


図2 保護者からの教育相談室への相談内容

相談内容の深刻さの分類(軽度、中度、重度 発達障害)を行った。

深刻さの分類基準:

軽度 友人関係の悩み、いじめ、1、2回の相談だけですむもの

中度 不登校、リストカット環境調整など他者の助力が必要なもの

重度 重度の摂食障害、自殺企図、直接生命にかかわるもの

病院や児童相談所の介入を必要とするもの

発達障害 上記とは別分類

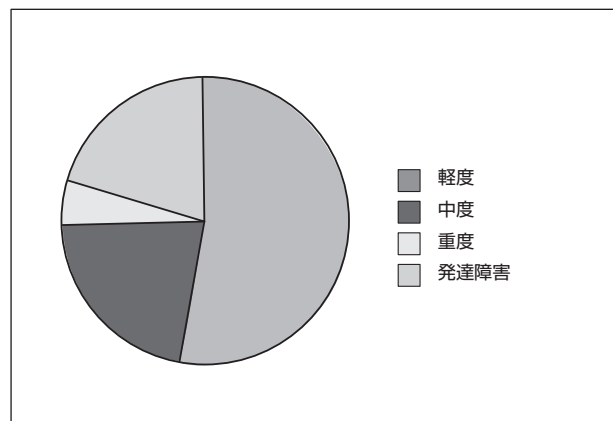


図3 相談の深刻さの分類

相談の大半は軽度で、スクールカウンセラーとの2～3回の相談で解決へと結びついていた。中度は不登校や登校渋り・摂食障害・睡眠障害などであり、スクールカウンセラーの家庭訪問、個別のサポーターとしてのDS(発達支援者・大学生)の介入が必要であった。重度では摂食障害による体重の著しい減少のための生命の危機・自殺企図・激しい虐待などであった。重度では日本人医師や日本国大使館など学校外からの多くの支援を得た(図3)。

## (2) 教育的ニーズに応えるために行った保護者の自助的支援活動「どんぐり会」の報告

### ① インテーク後のサポート

インテーク後のサポートはどのケースについても担任からの聞き取り、授業中や休み時間等の行動観察、学業成果等のデータとともに、保護者との連絡が取れているものについては保護者面接・本人面接を実施した。

WISCの検査・学習面のテスト(参考:世田谷区桜木中学校方式)実施等のアセスメントの結果、診断が必要と思われるケースについては国内の病院を紹介し、一次帰国の際に診断を受けた。

その他のケースは、担任・保護者と協議し、学校・家庭での支援方法についてカウンセリングとアドバイスを行った。

その後、必要に応じ継続的な観察と相談を行った。個別の支援が必要と思われる児童生徒については、保護者主体による自助的な支援が行われるような支援を企画した。

### ② 保護者主体による自助的な支援「どんぐり会」の活動報告

発達障害や認知上の課題をもつ児童生徒への支援が現在の教育活動の中では十分に行うことが困難であった。また保護者からの要望に「国内であれば通級学級や適応指導教室があるが、A市では支援がない」「学習支援の具体的な方法がわからない」「ソーシャルスキルを教えたいが、家庭内では限界がある」等の要望が寄せられていた。しかし、解決の方法として日本人社会やA日本人学校に支援を求めていくには多くの困難があった。教員の交代は3年で、海外であるが故の多忙と緊張状態もあって、ルーチンワーク以外の新しいことに挑戦しにくい環境にあった。

そこで保護者が子どものためにやれること、やりたいことを自動的に始めることにした。スクールカウンセラーの主導で、教育的ニーズのある児童・生徒の保護者同士が集まる場をつくった。さまざまな活動に取り組んだが、ここでは継続的な3つの活動を紹介する。

- a 週1回 親同士の交流の場
- b 月1回 ディキャンプ
- c 週1回 放課後活動「どんぐり会」：小集団による学習支援・運動機能訓練・ソーシャルスキルトレーニング等である。

サポーターとしてDS（親や先生以外の身近な大人＝発達モデル）として活躍した留学生が大きな役割を担った。

- a 親同士の交流の場  
毎週1回テーマを設け、保護者とスクールカウンセラーが集う。話題提供は参加者全員がもちまわりとする。下に活動のテーマを載せる（表2）。
- b ディキャンプ  
月1回、学校の休日を使い、市内の公園やスポーツ施設・大学構内・郊外で、ディキャンプを行った。普段忙しい父親やDSも参加し、総勢40名以上ということもあった。
- c 「どんぐり会」  
毎週1回 放課後に当該の子どもと兄弟姉妹（未就学児含む）保護者、発達支援者DS（多くが留学中の大学生）、スクールカウンセラーなど約15名が集って活動をした。下に「どんぐり会」の活動の日程と支援内容を載せる（表3）。

表2 親同士の交流の場での話題の題目

2008年	認知とは 学習障害ってなあに ペアレント・トレーニング 日本の特別支援教育 子育て経験談義
2009年	中国の特別支援教育 中国人の子育て観 アメリカの特別支援教育 外国での暮らし方・公寓の付き合い アスペルガー障害 学校との連携 担任との付き合い方 ディキャンプ 思春期をどう捉えるか 不登校と過剰適応 WISC-Ⅲの結果の読み取り PFスタディとは 海外生活での家族父親の存在
2010年	在外教育施設での特別支援教育 国内の学校との連携

表3 「どんぐり会」の活動・実施スケジュール

時刻	内容	形態	
14:30 ～15:00	個別の学習支援	個別	DSが個別につき、各自が学習課題に取り組む
	休憩		自由時間の過ごし方
15:15 ～16:00	運動機能訓練・ソーシャルスキルトレーニング・前頭葉機能訓練等	小集団	ソーシャルスキルトレーニング・イベント等

### (3) 「どんぐり会」の参加者へのアンケート調査

表4 どんぐり会参加者の意見

参加者		意見
Aさん	保護者	なんといっても他の人には話せない子どもの悩み、公寓（注1）での悩みを遠慮なく話せる。
Bさん	保護者	DSさん（大学生）をサポートにつけるのは思いつきもしませんでした。子どもの目線に立ったすばらしいアイデアです。
Cさん	保護者	大人が子どもと一緒にあって一生懸命遊んでくれる。自分だけのために来てくれるという子どもの喜びがとてもよく伝わってきてありがたかったです。子どもの自信につながりました。
Dさん	保護者	どんぐり会でありがたかった点は、学校の活動とは離れた有志、ボランティアで運営されていることでした。不登校からの回復期にはフリースクールのような学校とは別の受け皿がとても重要だと思いました。

Eさん	保護者	次男に関してはDSさんが世界を広げ、自信を持たせてくれたあと、「どんぐり会」で集団で活動する楽しさを知ることができたのでとてもよかったです。以前には見ないほどの明るさとたくまさが身についてきつつあるようで、DSさん「どんぐり会」のおかげだと思っていました。
Fさん	保護者	子どもは、クラスで居場所がなかったとき逃げ場があったことが今の救いです。私もカウンセリングだけでなく、「どんぐり会」のお母さん達とおしゃべりなどで一人で考えていたとき堂々巡りだった考えが少しほぐれたり、別な見方ができたりとよかったです。
Gさん	保護者	こどもにとって「どんぐり会」は思いつき遊びの週1の楽しみでした。おやつを食べる時間も惜しんで体育館などに向かってます。「DSさん」はどんぐり会にはなくてはならない人。DSさんがいないと「どんぐり会」もつまらないといっているくらいです。自分が中心になれるといううれしさがあるようです。
Hくん	児童	DSさんからいろんな情報が手に入ったりするから楽しい。 DSさんとの交流が楽しい。
Iちゃん	児童	どんぐり会はとてもたのしい。 学校は休んでも「どんぐり会」には参加したい。

保護者も子どもも「どんぐり会」の活動を楽しんで参加していたことが分かる。DSが参加することで発達モデルの役割、スキル学習の支援者、学習支援などの役割を果たしていたこと、不登校の児童の教室参加へのステップとしても機能したことなど保護者も児童生徒も楽しさが支えとなって、多くのことを学習するチャンスとなったことが伺える（表4）。

#### 4. 考察

①A日本人学校の児童生徒の現状は海外生活のため、だれにもストレスがある。それにも関わらず、在籍する児童生徒は自由な雰囲気と生気があり、学習への勤勉な取り組み、社会性も高く、学習外の活動も積極的に行われ、けなげに生きている感

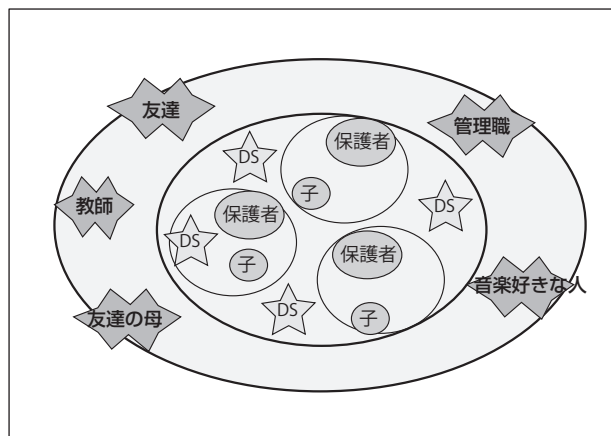


図4 保護者による支援のネットワーク図

がある。それは保護者の家庭の教育への関心が高く、丁寧な家庭教育が行われているからと思われる。しかし、深刻さの分類（図3）からもストレスを敏感に感じている児童生徒が多数いることが示唆される。特に発達障害のある子どもたちは環境の変化には弱く、影響を受けやすい。海外生活のストレスとA日本人学校がもっている緊張感等が、子どもにメリットとデメリットの両面の影響を及ぼしていると考えられる。

②サポートが成功した要因として

i 保護者の願いがあったこと

様々な制約のある環境の中で、我が子によりよい教育の場を作りたいという願いが原動力となった。

ii 主体が保護者であったこと

この活動は、行政や学校主導ではなかった。学校が主体となれば、活動を実現するためには、管理職・職員会議・理事会等の了解を得、また予算措置への手続きも必要となり、実現にまでに長い時間と労力がかかる。子ども達の成長は止まってはくれない。すぐにできる支援を優先したいという保護者の熱意が原動力だった。

iii 専門家との連携があったこと

主体は保護者であったが、活動を進めるために保護者が専門的知見を得ることの大切さを理解していた。カウンセラーだけでなく、カウンセラーの知人の心理士がスーパーバイザーの役割を果たした。

iv 全員が自助・共助の意識で繋がっていたこと

個人ではできなかったことが、皆が繋がって自

助・共助で行うことができた。

この活動は、子どもも保護者も、支援者であるDSも高い満足度を得ている。

支援する者・される者の立場を超えた活動であったと考える。

- ③2002年、全国の通常学級の4万人の児童生徒を対象にした「LD、ADHD、高機能自閉症等」についての調査によるとLD、ADHD、高機能自閉症の可能性があると思われる児童生徒は、6.3%という結果が出ている。A日本人学校での相談件数の内、発達障害（そのうち発達障害〔疑いも含む〕）が34名5.2%であったことを考えると、A日本人学校で、相談に上がってはいないが潜在的に教育的ニーズのある子どもは他にもいるのではないかと推察される。
- ④保護者の駐在が長年にわたり、子どもの状態に気がつかない例もあり、海外での特別支援教育の充実は必要と考える。今後、全児童・生徒を対象に気になる児童生徒の調査が行われることが望まれる。

## 5. 今後の課題

・海外での特別支援を困難にする要因として国内の発達障害者支援法が適用されないことがある。その意味からも自主的・自助的活動が必要である。

・特別支援活動の継続・持続には活動の場所の確保や配慮など、日本人社会、日本人学校全体の理解がなくてはならない。特別支援教育の本来の意図の普及が急がれる。

・マイナス面だけでなく、日本人社会が強い連帯感と互いに助け合って生きるプラスの状況もある。真の意味の理解と支援が作り出される可能性を含んでいる。

・児童生徒の多くはいずれ帰国する。日本国内での転入を考えると国内との連携（病院・専門機関・学校等）が不可欠である。連携方法を至急整える必要がある。

### 引用文献

阿子島茂美（2008）. A日本人学校における教育相談活動実践記録

阿子島茂美・漆澤恭子 他（2010）. 国外と国内を結ぶ特別支援Ⅰ—日本人学校の問題と解決のために—第19回

日本LD（学習障害）学会大会論文集  
漆澤恭子・阿子島茂美 他（2010）. 海外と国内を結ぶ特別支援教育Ⅱ—日本人学校からの国内へのスムーズな転入のために— 第19回日本LD（学習障害）学会大会論文集  
阿子島茂美・漆澤恭子 他（2010）. 海外での教育的ニーズに応える—保護者とD.S.の実践から— 第52回日本教育心理学会大会論文集  
外務省領事局（2009）留邦人調査統計 平成21年速報版

注：公寓

駐在員など（※多くは外国人）が住む高層集合住宅。門は24時間警備員がいて、一般人は自由に入出りできない。大使館や日本人幼稚園などが入っている公寓もある。安全性は抜群だが閉鎖された空間という感じが否めない。

## 研究Ⅱ

### 1. 研究目的

日本人学校に在籍する教育的ニーズのある児童生徒の帰国転入への不安や要望を知り、スムーズな帰国転入のための方途を探ることを目的とした。

### 2. 方法

初年度は、在中国A日本人学校（以下「A日本人学校」）を通して研究する。

#### （1）参観

平成21年10月、翌年1月の2回、教育的ニーズを必要とする児童・生徒の、学校生活への適応のための取り組みの実践を参観し理解する。

#### （2）調査

調査対象別に以下の質問を行った。なお、回答は自由記述とした。

##### ① 方法

1) 調査対象 A日本人学校に在籍している児童生徒（7名）と保護者（7名）児童生徒の回答は、保護者に記入を依頼したため同数となる

調査項目 「帰国転入にあたって不安なこと」「帰国転入にあたって希望すること」

調査時期 2010年3月

2) 調査対象 A日本人学校の教職員（20名）

調査項目 「児童の帰国転入にあたって不安な

- こと」
- 調査時期 2010年3月
- 3) 調査対象 A日本人学校からB国内小学校に転入した児童Cの保護者への聴き取り
- 調査項目 「帰国転入にあたって不安だったこと」  
「帰国転入にあたってよかったこと・希望すること」「帰国転入後の課題」
- 調査時期 2010年3月
- 4) 調査対象 A日本人学校からの転入児童の担任(1名)
- 調査項目 「帰国転入後の課題」
- 調査時期 2010年4月

### 3. 結果

上の調査から以下のような回答を得た。調査項目ごとにまとめる(表3、表4、表5)。

表3 帰国転入にあたって不安なこと

保護者(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○転入予定校は大規模校なので子どもにはストレスではないか</li> <li>○担任以外に相談できる専門家が居るか</li> <li>○日本人学校では放課後遊びがなく通学もバス。体力が落ちたことと通学が心配</li> <li>○転入予定校の先生に今までの様子を説明しても子どもを理解して貰えないのではないか</li> <li>○転入予定校の情報が得られない</li> <li>○今までのような手厚いサポートが期待できない</li> </ul>
児童生徒本人(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友達ができるか・できあがっている友達の輪に入っていけるのか</li> <li>○好き嫌いがあるので給食が心配</li> <li>○日本の学校と学力、体力の差があつてついていけるか</li> <li>○以前仲良くしていた友達が以前のようにつき合ってくれるのか</li> </ul>
B小 転入保護者(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校はどんなところがいいのかわからない。インターネットで検索をしても有益な情報を得られない。学校のHPを見ても、特別に配慮が必要な児童に対してのことは知ることができず、国外にいなから情報を集める難しさを感じた。</li> <li>○保護者は、転入先の学校にどのように本人の特徴について話をしたらいいか。また話をすることで、不利益になることはないのだろうか。</li> </ul>

日本人学校教職員(20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本人が学校になじめなかったり不安が高まったとき、一緒に考え、学校や保護者に対応の指南をしてくれる人はいるのだろうか</li> <li>○医療や療育などの専門機関と保護者と学校とがどうやって連携していけるか</li> </ul>
日本人学校教職員(20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○(学習の遅れや、周りが見えない児童や、落ち着きのない児童について) ドッジボールやゲームのルールが解らず、周りに迷惑をかけることもある。今後ルールの理解が不十分のために、周りから冷ややかな目で見られることが、いじめにつながるのではないかと心配である</li> <li>○中学生になり、本人も周りも成長してきて、問題と思われる行動も減ってきた</li> <li>○(洗浄強迫・選択性緘黙・高機能自閉症・不登校の児童たちについて) 転入学校と日本人学校との引き継ぎがうまくいくだろうか</li> <li>○(学習が遅れている児童について) 特に国語力の遅れがあり、周りの子にバカにされてしまわないか心配</li> <li>○(学習の遅れ・集団に入れない児童について) 日本の友達関係は、こちらよりもっとシビアであると聞くのでやっていけるだろうか</li> <li>○(学校に行けない、授業に出られない児童について) 本児のペースに合わせて見て貰えるかどうか心配</li> <li>○(忘れ物が多い、落ち着きがない児童について) 周囲の児童・生徒への適応ができるかどうか心配</li> <li>○(本人にはその気はないのだが、授業を脱線させるような質問を繰り返す、空気が読めない児童について) 本児の特性を担任や学級の友達に理解して貰えるかまた、人間関係をつくっていくことが苦手なケースが多いので、帰国後本人が壁にぶつかったときに頼れる人がいるかどうか心配</li> </ul>

表4 転入にあたって希望すること

保護者(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○引き継ぎにあたっては、伝えること・伝えないことを児童生徒・保護者の意向を十分にふまえて行ってほしい</li> <li>○転入学校の情報を知りたいがどこまで聞けるか、本音が聞けるかは気になる</li> <li>○日本人学校と転入学校のスクールカウンセラー間の一人一人の子どもに対する引き継ぎがうまくなされるような、充実した特別支援体制が国内外で確立することを望む</li> <li>○子どものことで何か感じたり疑問があったりしたときには日本人学校に問い合わせしてほしい</li> </ul>
--------	--

B 小 保 護 者 ( <u>I</u> )	<ul style="list-style-type: none"> <li>○転入先の学校での、児童の安心感をつくる受け入れ体制</li> <li>○公立小学校では異動がやむを得ない。調子がいいときもそうでないときも継続して様子を知ってしてくれる人の存在。(A校での様子を知っている先生やカウンセラーが訪ねてきてくれたのが嬉しかった)</li> <li>○子どもに関わる周りの大人達が連携をしていくことが大切である。学校と保護者が情報を共有し合って対応を探っていけるつながりがあるといい</li> <li>○発達障害やその傾向がある児童の場合、専門家のアドバイス</li> </ul>
---------------------------------------	---

表5 帰国直後の課題

B 小 保 護 者 ( <u>I</u> )	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どものことだけでなく、住居、他の兄弟のことなど同時にやらなくてはならないことが多く大変だった</li> <li>○どうやって、転入校と連携をして貰える専門家を捜せばよいかわからず、転入直後の子どもの混乱を見て焦った</li> </ul>
B 小 担 任 ( <u>I</u> )	<ul style="list-style-type: none"> <li>○転入後しばらくはA校での経験が先行し、その行動にクラスの子ども達からわがままだと言われた。(例：黒板消しなどクラスの子が率先してやってくれるようなことを頼んだとき「そんなの前の学校ではだれもやらなかったよ」と手をつけなかったり、促しても板書をノートに写さないなど)</li> <li>○思い通りに行かないとき、意思疎通がうまくいかなかったときなど、泣いたり腹をたてたり、手が出たりすることがあった</li> <li>○自分のしたことを率直に認められず、学級の中でトラブルになることがあった</li> </ul>

### (3) 帰国へのサポートの実践

筆者は、C児（以後C児とする）がA日本人学校からB国内小学校に転入したとき、B校の特別支援教育コーディネーターであった。

帰国がきまり、C児保護者から国内転入先を相談されたA日本人学校スクールカウンセラーは、C児の特性や保護者の勤務等を考慮し数校を挙げた。

その一校であるB校にC児と保護者が参観にすることが決まったとき、スクールカウンセラーから筆者に連絡があった。

その後の経過を記す。

①副校長、筆者およびもう一人のコーディネーターの計3人が見学の窓口になった。

ここでは、とにかくありのままを観てもらおうこととし、また説明の時には、単学級であること、個別

の配慮を必要とする児童が在籍していることもプライバシーに配慮して副校長が話すことにした。

②スクールカウンセラーが筆者を紹介してあったので、この学校におけるキーパーソンと成るべく、細部に渡る質問もしやすいような温かく親和的な雰囲気を作るよう心がけた。

③転入が決定した時点で、保護者の許可を得て、他のコーディネーターと共にC児の特性、必要とされるサポートの概要などを管理職に情報提供した。

④学校生活が始まってからは、担任と情報共有を行ったり、相談にのったりした。また必要に応じて、A日本人学校のスクールカウンセラーと連絡をとった。

⑤入学3ヶ月後の夏休みにA日本人学校スクールカウンセラー、C児をよく知る心理士と担任、C児保護者、筆者が参加する懇談会を計画した。

⑥C児の在籍する学級の、他の児童への支援も必要である。疑問や不満を担任以外にも受け止める者がいることで、C児への理解や寛容さが育ったように思う。

⑦B校には放課後の遊び場施設もあり、C児は好んで参加した。この施設との連携を図った。

## 4. 考察

以上の結果と効果を上げている事例を参考に、国内へのスムーズな転入のためのサポートについて、次のように提案する。

### (1) 転入学校の決定までのサポート

①保護者の帰国辞令から帰国までは間がなく、子どもと本人と保護者が多くの候補校に一から足を運んで学校を決めることは難しい。そこで、条件にあった国内の学校情報がある程度絞って提供できるよう、日本人学校に事務担当とは別に帰国サポート担当を設置する。

そこでは、スクールカウンセラーも関わり、専門的な知見を加味した情報提供を行う。そこでのキーパーソンとなるスクールカウンセラーについては、それまでの国内での活動を生かし幅広い情報を得られるようさらに国内との連携に努める。

広く有効な情報を得るための一例として関連学会等のメーリングリストの活用がある。



## (2) 転入学校の受け入れ体制のサポート

### ①引き継ぎ資料の作成

児童生徒本人、保護者との了解を得た上で、具体的な引き継ぎ資料を日本人学校スクールカウンセラーが作成する。

担任はじめ関係者から情報を集め、児童生徒本人の特性（対人関係、学習等）のほかに、環境の違いがストレスになっている事例もあり、日本人学校の環境や教育活動の特徴などの記載も必要である。

効果のあった事例に、「友達と仲良くなれるきっかけのヒント」として本児のよいところを具体的に挙げた資料があった。早速それを使った担任から「普段は無口な本児がサッカーのキックについては何度も友達に丁寧に教える姿を見て、女子も一目置くようになった」と聞いた。

### ②転入学校のキーパーソンの設定

転校前に、A日本人学校のスクールカウンセラーと転入先のB校のコーディネーターの間で本児の特徴的なことがらについて話ができていることがスムーズな転入に役立った。

転入学校の担当は、事務担当とは別に障害に対する専門性を持つ人材が望ましい。

## (3) 転入後の学校生活への支援

### ①日本人学校スクールカウンセラーの訪問

転入早期に転入学校を訪問し、当該児童の授業・生活等の参観と担任・特別支援コーディネーター等と話し合いの機会を持った。

これは、指導法に悩んでいた担任にもとても好評で歓迎された。

### ②複数のキーパーソンを置く

転入後のキーパーソンは、担任、日本人学校と連携を図る担当者（スクールカウンセラーなど）である。

しかし、そのほかにA日本人学校の実践で挙げたDS的な存在も大きい。C児の転入の事例で有効だった例には校内の放課後遊び場施設指導員がいる。この指導員は、これまでの注意の仕方ではC児に受け入れて貰えないと試行錯誤を重ね、本児にあう対

応を編み出した。これは遊びの中で個別に関われる立場を利用したキーパーソンである。

### ③専門機関との連携

i 国立特別支援教育総合研究所「発達障害教育情報センター」では、海外渡航者・日本人学校関係者への支援情報の提供を行っている。

ii 社団法人神奈川LD協会では「海外日本人学校支援事業」として・児童生徒、保護者、学校職員の相談、一時帰国時の児童生徒保護者への相談、情報提供、帰国後の転入先学校との連携等と、そのための日本人学校への人材派遣も企画していたが現在は休止中である。

## 5. 今後の課題

(1) 調査地域を広げ、さまざまな教育的ニーズを把握しサポート方法を考える必要がある。

(2) 本稿ではスクールカウンセラーが配置されている日本人学校を取り上げたが、すべての日本人学校でこのようなスクールカウンセラーが配置されることが急務である。

また、国内の小学校にもスクールカウンセラーの常駐が望まれる。

(3) 回答にあった不安で多いのは、いじめはないか、受け入れて貰えるかという人間関係である。これは海外からの転入に限らず校内のクラス替えでも聞かれる不安である。

児童生徒それぞれに一人一人の違いを認め受け入れあえる心を育てる教育、学級経営についてはこれからも充実を図っていく必要がある。

併せて担任はじめ児童生徒に関わる全教職員の児童理解研修の必要性も改めて挙げておく。

## 引用文献

阿子島茂美 「A日本人学校における教育相談活動実践記録」

漆澤恭子他4名 2010 5 日本LD学会論文集「海外と国内を結ぶ特別支援1」 日本LD学会編

